

－創業30周年記念講演－ 愛華農法の謎に迫る

第15回愛華農法シンポジウム 主催者挨拶

【愛華農法を読み解く鍵－その想いと資材開発への道程－（創業30周年を記念して）  
（株）愛華 代表取締役社長 加地良一】平成25年10月11日（金） 於：サンメッセ鳥栖

開会 主催者挨拶

（株）愛華 代表取締役社長 加地良一

## 愛華農法を読み解く鍵



－その想いと資材開発への道程－

（創業30周年を記念して）

1. 第15回愛華農法シンポジウム開催の意義
2. 創業時から今日迄の思想的(考え方)変遷  
－行動力の源・原点－
3. わが国に於いて私が考える3つの栽培法
4. それらを感じ覚的に表現すると
5. 伝統的農法から「近代農法」へ。さらに、その先を目指して
6. 具体的、資材開発へのアプローチへ
7. 持続的・環境保全型農業への成長戦略  
－愛華アグリノミクス－“第3の矢”
8. いかによれば「品質競争」と「コスト競争」に勝てるか  
－「安全」「価値」「コスト」－から  
終わりに……

－創業30周年記念講演－ 愛華農法の謎に迫る 第15回愛華農法シンポジウム

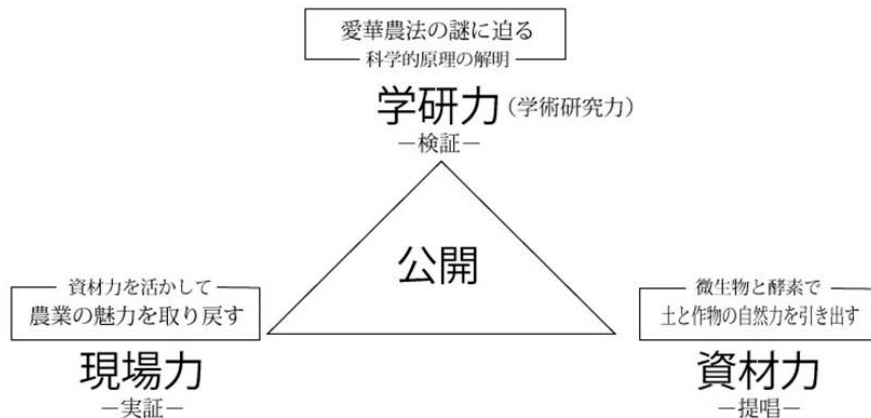
2013/10/11

愛華の社長の加地でございます。ほんとに今日はおいで頂きまして有難うございました。30年というのはですね、皆さん大きな会社に入っておられるからわからないとは思いますが、ちょっと調べさせたのですが、国税庁の統計によると、10年以上存続できる企業は6.3%だそうです。20年で0.3%、30年で残るのは0.025%で、なかなか小さな会社が生き残るのは大変なことだと思っています。試行錯誤を繰り返しながら、皆様に支えられて、今日ここへ立たせて頂いていることを深く深く感謝申し上げます。30年あるのはですね、今日何人もここへ来て頂いております、最初からずっとご愛用頂いて、支えてくださった方なんでしょうね。そういった方々に育てて頂いて今日があるということと、なかでも平成9年から川崎重治先生がずっとご指導していただきました。もう16、7年になります。続いて今日ご講演いただきます手塚博志氏が平成10年からずっと一緒に仕事をさせて頂きました。ほんとにこの二人のお陰です。そして今日は手塚社長のお力で福井先生のお話をうけたまわることができます。誠に光栄です。今日は私の持ち分は15分しかないのですが、端折りながらお話をさせて頂きたいと思っております。

## 1. 第15回愛華農法シンポジウム開催の意義

第1回目のシンポジウムから、提唱→実証→検証→公開を原則として開催してきました。そういう意味で、今回は理想の形で開催することが出来ました。

資材力・現場力・学研力のお互いの立場と役割が明確となり、総合力が高められた記念すべきシンポジウムとなりました。関係者の皆様に心より感謝申し上げます。



今日は、福井先生がですね、「愛華農法の謎に迫る」というお話ですからね、私がただ挨拶だけというのにも能がないなあと思って、こういうテーマを掲げさせていただきました。「愛華農法を読み解く鍵～その想いと資材開発の道程」ということでご紹介させていただきたいと思います。

今回のシンポジウム開催の意義というのは「資材力」と「現場力」と「学研力」という3つが揃ったという事だと思います。わたしは一番最初のシンポジウムから提唱→実証→検証→公開を原則として開催してきました。しかし、基本的には生産者様を中心に川崎先生中心に、手塚社長中心にしてきたシンポジウムでした。今回はじめて福井先生のご参画によって「資材力」という形をとらせていただきました。わたしは農業というのは守る力が中心ではないかと思うんです。そしてその売る力というのが体制の中では支えていると思うんですけど、しかし、大切なのはですね、今 TPP だとか高齢化だとか、後継者不足だとかいわれる中で、「変わる力」「変える力」が大切なんじゃないかと思ってるんです。「変える力」に私どもの資材が少しでもお役に立てればと思います。そして、その裏付けとして今日、先生からお話を承るわけでございます。

続きまして創業時から今日迄の思想的（考え方）変遷と記載していますが、1983年（昭和58年）7月1日に創業しました。その時の事業目的（経営理念）に“健康・豊かさ・生きがい”をトータルに求めて”というテーマで事業をやったんです。佐賀出身の三愛リコーの創業者市村清氏の婦人の要請で、グループの教育を担当していた会社のトップの仲介で、三者で始まった事業ですが、2年後にわたしが病気をしまして落ちこぼれてしまったんです。福

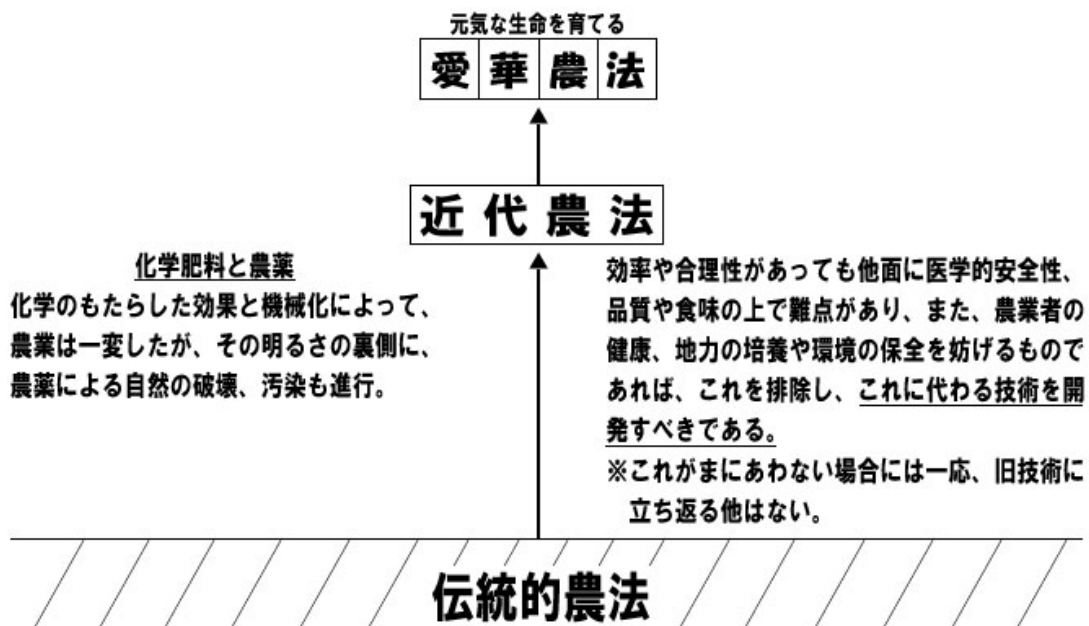
大病院入院し、手術（虫垂炎）→敗血症・肺水腫・肺ショックで危篤状態になり、いったん退院したんですが、また、再入院し急性肝炎で再度危篤状態になったり、3回ほど入退院を繰り返したんですが、5年間闘病生活をしました。みんな友達が活躍していく中、ひたすら横に倒されていたんです。しかし、その時に心情的に支えられていた言葉があり、「ゆっくり行くものは遠くまで行く」というフランスの諺でしたが、そう思いながら、たいしたことはないと思いながら5年間の闘病生活をしました、そしてその間に一番心を打たれたのは「食べて治す」という本でした。この本はアメリカでノーベル賞をもらった方など複数の方が書かれた本で、この本が支えでした。「どうして食べて治すか？」そしてその世界へ入っていった次第です。退院してから“元気な生命（植物）はどうすれば育てられるか”、そのことを1990年から10年考えて来たんです。そして、開発したのが5つの資材です。

次に、「わが国に於いて私が考える3つの栽培法」をご覧ください。「戦略論的栽培法」「戦術論的栽培法」「精神論的栽培法」の3つを異論もあるかもしれませんが、掲げてみました。それらをビジュアルに表現したものがスクリーン（C6H12O6/N）です。



炭水化物と窒素ですが、この図の一番上を私は目指しているんです。資材の開発に一番上を目指してきたんです。

この図をご覧頂いて次ぎに「伝統的農法から「近代農法」へ。さらにその先を目指して」をご覧ください。



「食料」「環境」「資源」「安全性」「生産性」など、今日、農業が抱える問題解決のために、農薬中心の栽培技術から、健康で丈夫な植物体を育てることで、耐病害虫性に強く、高品質で多収穫を可能にする新たな栽培技術革新として、発酵代謝産物（酵素・微生物）を活用。作物のもつ自然力、驚異的潜在能力を引き出す栽培技術として体系化を行ってきた。よく、何々農法というのは一つで言う場合がありますけど、一つでパーフェクトというのはあり得ないと思っております。始め一つの資材から五つの資材へ行き着いたのですが、「近代農業」を生意気に解釈させていただきますと（図を参照）近代農業というのが出来てですね生産者の数はグーッと減ったのでしょ。う。すごく生産量が増えて次男三男は東京や大阪へ出稼ぎに行ったと。工業化が進んでいったということだと思いますが、「肥料や農薬」だけのジャンルではない「近代農業」のさらに上を目指したいと発酵代謝産物（酵素・微生物）を活用して作り上げたのが「愛華農法」です。

## 6. 具体的資材開発へのアプローチ

### ① 光・土・水を中心に諸々の障害物と対策を考える

#### ※「光合成促進」

地上部 農薬散布による葉の痛みなど

地下部

土が固い。未熟堆肥から出るガス、硫化水素、アンモニア、腐敗菌、未分解の多量の肥料、農薬、カビ（アブラナ科の根こぶの原因）PH等々。

#### ※「健全な根」

### ② 問題解決と資材開発の経緯

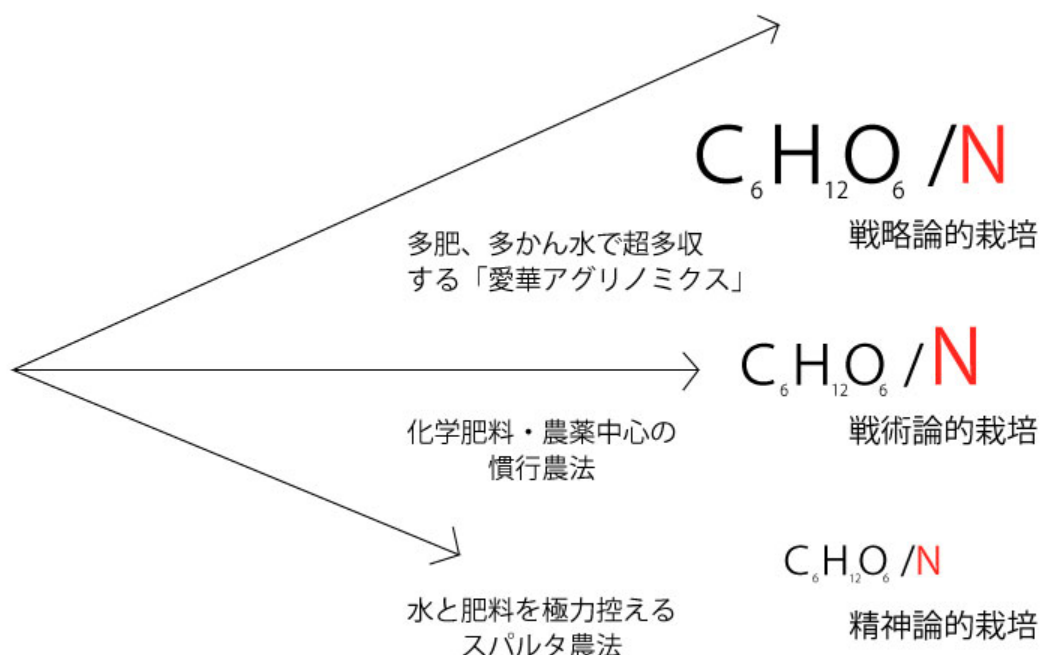
イ、“それは苺から始まった”なぜ、苺を選んだか？  
1. 技術的 2. 経営上 3. 市場性 4. 地域上  
5. 作業性 6. 健康面: 安心安全が強く求められる産物などの理由から・・・。

ロ、育苗から、収穫末期まで(課題を明確にして、課題を解決)ー以下の問題解決に取り組んでいく課程で、結果、5つの資材の必要性と、各々の使い方がトータル的に確立され、新しい栽培技術として体系化された。

ハ、1. 病気予防 2. 根の活性 3. Nコントロール  
花芽誘導(栄養生長の抑制) 4. 定植時の活着促進 5. 連続花芽出蕾 6. 株疲れ対策  
7. 根の活性化 8. 土中の硫化水素対策  
9. 色、味、玉太り、日持ち対策10. 病害虫予防  
11. 蜂を元気にして不熟果を少なくする  
12. その他

次に「具体的資材開発へのアプローチ」としてありますが、図の左側に書いてありますが、光・土・水を中心に諸々の障害物と対策を考える、基本的には地下部、土が固い。未熟堆肥から出るガス、硫化水素、アンモニア、腐敗菌、未分解の多量の肥料、農薬、カビ（アブラナ科の根こぶの原因）PH等々を解決していくことによって健全な根を作っていく。そして、一方、地上部では光合成を促進させていくという資材を開発してきました。農薬散布による葉の痛みなどは歴然としていますが、この資材の効果を試すためにわたしは苺からスタートしました。苺栽培は大変難しく12ヶ月から15ヶ月かかる長期で手間のかかる作物です。今日もおいで頂いておりますが、15年苺の現状分析、問題解決にご意見をお伺いしながら、対策を一つ一つ作り上げて、希釈倍率なども協議しながら、2000年に第1回目のシンポジウムを開催いたしました。その過程で川崎先生や手塚社長にはご指導いただきました。

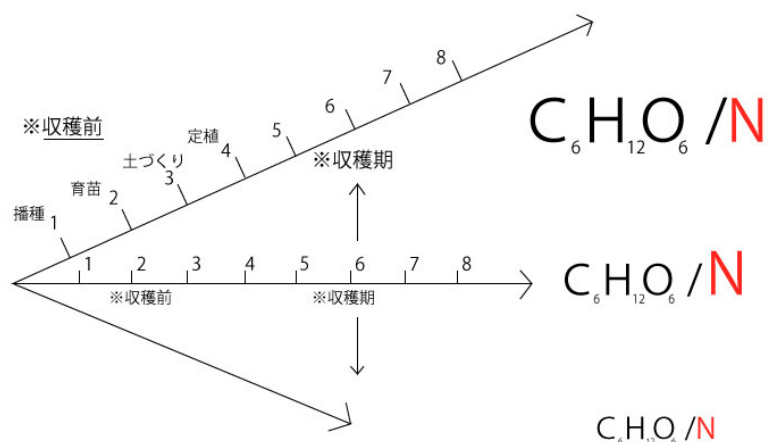
続いて、「持続的・環境保全型農業への成長戦略」（図を参照）



わたしはですね、3つの  $C_6H_{12}O_6/N$  をご覧頂きたいのですが、一番したの「水と肥料を極力控えるスパルタ農法」（精神論的栽培）とありますが、トマト栽培などでも肥料と水を抑える農法ですが、「どうして？肥料も水も沢山あるこの日本でそうしなければいけないのか？」「それじゃ、とれんでしょ？」とオランダは10アールでトマト70トンもとって、日本は20トンとか、やはりマインドセットされているんじゃないか？という風に思っています。それで私はその対極にある「愛華農法」で「農法」に関しては先生方も抵抗があるんですが、わたしがあえて今回も「農法」としたのは、水と肥料を切る栽培と180度対極にあるんですよ、それでも出来ますよということを「愛華農法」としてお伝えする。「多肥多かん水で超多収する「愛華アグリノミクス」」と今回記載してありますが、「農法」なんてどうでもよくて、皆さんが、この5つの資材を自分のものにされていただければ良いと思っています。図真ん中の「化学肥料・農業中心の慣行農法」（戦術論的栽培）はどうですか？沢山とりたからといって肥料を増やすけど肥料過多で病気や虫が増えて、窒素過多で窒素をどう減らしたら良くなってなる。しかし、私は違うと思っている。 $C_6H_{12}O_6$ のブドウ糖を増やしていかなければとれないでしょ？どうして窒素を減らす方向へ走るのか？と思うのです。そのために、先ほど申したように、健全な根の育成と光合成を盛んにさせることによって収量と品質をあげるのです。窒素が多いということは作物が腐れやすいということです。虫が多いということです。本日は東京青果様もお見えですが、当時の常務さんに「腐らん苺を持ってこい！」と言われたことがあります。腐るんですよ。肥料過多で。。そうなる、窒素を減らすか？炭水化物を増やすのか？になると思います。わたくしどもは、炭水化物を増やす栽培法でやっていくということです。



次に、「いかにすれば「品質競争」と「コスト競争」に勝てるか」です。(図を参照)



真ん中の窒素が多い状態での栽培で中途から農薬みたいに対処療法的に弊社資材を使用するよりも生育初期から弊社資材を使うとさらに良いわけです。

最後になりますが、まずは「この3つの栽培法の中であなたはどの路線を選ぶのか？」ということです。(図を参照) わたくしどもは情動的に、「殺さない、腐らせない、ストレスを与えない」を訴えてきましたが、播種・育苗・土づくり・定植段階で早いステージから使うと理想的です。こんな生意気なことを言えるのは、私は30年やって、15回シンポジウムを開催させていただき、今回は先生の後ろ盾もあり言っています。とにかく収量をとりたいと思うならば、窒素を切る栽培法ではなく、わたくしどもの炭水化物を増やす栽培法をおすすめいたします。肥料でも農薬でもない「特殊肥料」という登録です。酵素や微生物のたぐいは「特殊肥料」というジャンルで登録しております。図に記載しておりますが、「根群と茎葉の機能が強く、水分の要求量が多く、また、土壤微生物(餌)や作物の吸収などで窒素の消費量が多い。したがって、施肥とくに窒素の肥効維持と同時に、土壤水分の補給が要点で、これが欠けるとその機能が発揮できなく、成果は期待できない。」炭水化物  $C_6H_{12}O_6$  の H は水ですよね。水を切ったら  $C_6H_{12}O_6$  は大きくなりません。炭水化物が増えないから窒素は同化しないんです。今日は梨の方もパネリストで参加しておりますが、10月収穫の梨が4月まで腐らないで売れるというのは窒素をうまく同化しているからだと思います。これから TPP などもあり国際競争に勝っていかなければならない。こういう「資材力」を活かしていただいて、皆さんが心配しないで苦労しないでもっと楽しく仕事が出来ないかな？もっと楽しく成果があがらないかな？という気持ちがいつも「資材屋」の立場としてあります。そして、わたくしはこれからの農業は「生涯現役」と「家族主義の復活」だと思っています。家族でやらないといけないと。そのためには儲からないといけないということだと思います。それが、ひいては国際競争に勝てるという、そういう農業になってもらいたいというのが今の願いであります。甚だ生意気な話をさせていただいたとは存じますが、これを機に是非とも深いご縁を賜りたいと切に願い、私のご挨拶とさせていただきます。有難うございました。